強い賢い王様の話

豊島与志雄

むかし印度（いんど）のある国に、一人の王子がありました。国王からは大事（だいじ）に育（そだ）てられ、国民からは慕（した）われて、ゆくゆくは立派（りっぱ）な王様になられるに違（ちが）いないと、皆（みな）から望（のぞ）みをかけられていました。

ところが、この王子に一つの癖（くせ）がありました。それは、むやみに高い所へあがるということでした。庭（にわ）で遊（あそ）んでいると、大きな庭石（にわいし）の上に登（のぼ）って喜（よろこ）んでいますし、室（へや）の中にいると、机（つくえ）や卓子（テイブル）の上に座（すわ）りこんでいます。そういう癖（くせ）がひどくなると、しまいには、後庭（こうてい）の大きな木によじ登（のぼ）ったり、城壁（じょうへき）の上に登（のぼ）ったりするようになりました。国王や家来（けらい）たちは心配（しんぱい）しまして、

もし高いところから落ちて怪我でもされるとたいへんだというので、いろいろいってきかせましたが、王子は平気でした。ある時なんかは、城の中に飼ってある象の背中に乗って、裏門から町へでて行こうとまでしました。その象がまた、平素はごく荒っぽいのに、その時ばかりは、王子を背にのせたまま、おとなしくのそりのそりと歩いているのではありませんか。

国王はひどく心配しまして、なにか面白い遊びごとをすすめて、王子の気を散らさせるにかぎると思いました。それで、多くの学者たちが集って、いろんな面白い遊びごとを考えだしては王子に勧めました。す

ると王子はこう答(こた)えました。

「高いところからまわりを見おろすのが一番面白(おもしろ)い。世の中にこれほど面白(おもしろ)いことはない」

どうにも仕方(しかた)がありませんでした。それで皆(みな)は相談(そうだん)して、その癖(くせ)が止(や)むまでしばらくの間(あいだ)、王子を広い庭(にわ)に閉(と)じこめることになりました。庭(にわ)には木も石もなく、ただ平(たい)らな地面(じめん)が高い壁(かべ)に取り巻(ま)かれてるきりでした。王子は朝から夕方まで、この庭(にわ)の中に閉(と)じこめられまして、どこを見ても、自分があがれるような高いものは、なに一つありませんでした。そして、とうてい登(のぼ)れないほどの高い壁(かべ)が四方にあるだけ、なおさらつま

らなくなりました。いろんな遊びごとを皆から勧められても、王子は見向きもしませんでした。芝生の上に寝ころんで、ぼんやり日を過しました。

ある日も、王子は芝生の上に寝ころんで、向うの高い壁をぼんやり眺めていました。壁の向うには、青々とした山の頂が覗いていました。その山の上には白い雲が浮んでいて、さらにその上遠くに、大空が円くかぶさっていました。

「あの壁の上にあがったら……、あの山にあがったら……、あの雲にあがったら……、そしてあの空の天井の上に……」

王子は一人で空想にふけりながら、大空を眺めてるうちに、いつか、うっとりした気持になって、うつらうつら眠りかけました。

誰かが自分を呼ぶようなので、王子はふと眼を開きました。見ると、すぐ前に一人の老人が立っていました。真黒な帽子をかぶり、真黒な服をつけ、真黒な靴をはき、手に曲りくねった杖を持っていました。顔には真白な髯が生えて、その間から大きな眼が光っていました。

王子が眼を覚したのを見て、老人はハハハと声高く笑いました。王子は恐れもしないで尋ねました。

「お前は誰（だれ）だ？」
老人（ろうじん）はまた笑（わら）っていいました。
「誰（だれ）でもいい。お前をためしにきた者だ。……わしがお前を高いところへつれて行ってやろう。わしと一緒（しょ）にくるがいい」
「本当（ほんとう）に高い所へつれていってくれるのか、僕（ぼく）が望（のぞ）むだけ高いところへ？」
「うむ、どんな高いところへでも連（つ）れていってやる。そのかわり、また下へおりようといっても、それはわしは知らない。それでよかったらわしと一緒（しょ）にくるがいい」

「行こう」

そういって王子は立ちあがりました。

「しかし、下へおりたくなったからといっても、もうわしは助けてやらないよ」と老人はいいました。

「高いところへあがれさえすれば、下へなんかはおりなくてもよい」と王子は答えました。

「それでは行こう」

老人は王子の手を取って、杖を一振り振ったかと思うと、二人はもう高い壁の上にあがっていました。王子はびっくりしました。この老人は魔法使いに違いない、と思いました。しかし恐がることがあるものか、

と思いなおしました。見ると、自分が今まで居た庭や城外の町などはずっと、下の方に見おろされました。往き来してる人間が、豆粒のように小さく見えました。王子は嬉しくてたまりませんでした。そして、城の高い塔を指して老人にいいました。

「こんどはあの塔の上に行こう」

老人が杖を振ると、二人は一番高い塔の屋根にあがりました。王子はまだこんな高いところへあがったことがありませんでした。足下には、広い城が玩具のように小さくなって、一足に跨げそうでした。庭や森や城壁や堀などが、一目に見て取れて、練兵場の兵士

たちが、蟻の行列くらいにしか思われませんでした。城のまわりには、小石を並べたような町並が、遠くまで続いていました。その末は広々とした野になって、一面に、ぼうと霞んでいました。王子はただうっとりと眺めていました。

「まだ高いところへあがりたいか」と老人はいいました。

王子は我に返って老人の顔を見あげました。それから、向うの高い山の頂を指しました。

「あの山の上へ行こう」

老人が杖を振ると、二人は宙を飛んで、すぐにその

高い山の上にきました。王子はそこの岩の上に立って眺めました。城や町はもうひとつの点ぐらいにしか見えませんでした。土饅頭ぐらいな、なだらかな丘が起伏して、その先は広い平らな野となり、緑の毛氈をひろげたような中に、森や林が黒い点を落していて、日の光りに輝いてる一筋の大河が、帯のようにうねっていました。

「もうこれきりにしようか」と老人がいいました。

王子はまた夢からさめたような気持で、老人の顔を眺めました。それから、うしろの方の一番高い山の頂を指しました。

「あの山の上へ行こう」

老人が杖を振ると、二人はまた宙を飛んでその山の上へ行きました。

王子はびっくりしました。その山が一番高いのかと思っていましたのに、きてみると、さらに高い山が向うに聳えています。王子はいいました。

「あの山の上へ行こう」

老人と王子とはまたその山の頂へ行きました。すると、さらに高い山がまた向うにでてきました。もう下の方を見廻しても、積み重った山や遠い野が少し見えるきりで、初めのような美しい景色は眼にはい

りませんでした。薄黒い雲がすぐ前を飛んで行きました。

「あの山の上へ行こう」と王子は向うの高い山を指していいました。

「望むならつれていってもいい」と老人は答えました。

「しかし帰りはお前一人だぞ。城の庭へおろしてくれといっても、わしは知らないが、それでもいいのか」

王子は少し心細くなってきましたが、それでも構わないと答えました。そして二人は向うの山の上へ行きました。もう、なんにも見えませんでした。薄黒い雲が足下に一面にひろがっていて、遠くの下の方で雷

が鳴るような音がしていました。雲よりも高い山だったのでした。それでも、向うにはさらに高い山がつき立っていました。

「あの山へ行こう」と王子はいいました。

王子はただ高いところへあがって行くことよりほかには、なにも考えてはいませんでした。この老人に負けてなるものか、どんな高いところへでもあがってやる、という気でいっぱいになっていました。そして二、三度高い方の山へと、老人につれられてあがってゆきました。

ある山の上にくると、老人はそこにとんと杖をつい

ていいました。

「お前の強情なのにはわしも呆れた。これが世界で一番高い山だ。もう世界中でこれより高いところはない。ここまでくればお前も本望だろう。これからまた下へおりて行くがいい。はじめからの約束だから、わしはもう知らない。これでお別れだ」

王子が眼をあげて見ると、もう老人の姿は消えてしまっていました。王子はぼんやりあたりを見廻しました。頭の上には、澄みきった大空と太陽とがあるばかりでした。立っているところは、つき立った岩の上で、眼もくらむほど下の方に、白雲と黒雲とが湧き

立って、なにも見えませんでした。冷(つめ)たい風が吹(ふ)きつけてきて、今にも大嵐(おおあらし)になりそうでした。王子は腕(うで)を組(く)んで、岩(いわ)の上に座(すわ)りました。いつまでもじっと我慢(がまん)していました。しかし、そのうちに、だんだん恐(おそろ)しくなってきました。風が激(はげ)しくなり、足下(あしもと)の雲(くも)がむくむくと湧(わ)き立って、遥(はる)か下の方に雷(かみなり)の音まで響(ひび)きました。王子はそっと下の方を覗(のぞ)いてみました。

屏風(びょうぶ)のようにつき立った断崖(きりぎし)で、匐(は)いおりて行くなどということはとうていできませんでした。

王子は立ちあがりました。そして考えました。

「あの老人(ろうじん)に助(たす)けを求(もと)めたくはない。なあに、命(いのち)が

けでおりてみせる。僕が死ぬか、それとも、うち勝つかだ」

王子は石を一つ拾って、それを力まかせに投げてみました。石は遙か下の方の雲に巻きこまれたまま、なんの響きも返しませんでした。

「よしッ！」

と王子はいいました。

そして、岩の上から真逆さまに、むくむくとしてる雲のなかをめがけて、力一ぱいに飛びおりました。

…………………………

王子は、はっとして我に返りました。

見ると、自分は城の庭の芝生の上に寝ころんでるのでした。からだ中汗ぐっしょりになって胸が高く動悸していました。

しかし、いくら考えてみても、さっきまでのことが夢であるかまたは本当であるか、どうもはっきりしませんでした。本当だとするには、あまり不思議きわまることでしたし、夢だとするには、あまりはっきりしすぎていました。

「どちらでも構うものか」と王子は考えました。そしてまたこう考えました。「高いところへあがるには、まず第一に、また下へおりられるような道をこしらえ

ておかなければいけない」
王子はそのことを国王へ話しました。
国王はたいへん喜んで、それからは王子を自由にさせました。
王子はやはり高いところへあがるのがすきでしたが、ちゃんとその下り道をこしらえてからあがるので、少しも危いことはありませんでした。

…………………………

この王子は後に、世界で一番強い、一番賢い王様になりました。
なぜなら、どんな高いところへあがっても平気なほ

どしっかりした気象（きしょう）でしたから、一番強（つよ）かったのですし、またちゃんと下（お）り道（みち）をこしらえておくほど用心深（ようじんぶか）かったから、一番賢（かしこ）いのでした。

そして王子は一生のあいだ、あの黒（くろ）い着物（きもの）の白髯（はくぜん）の老人（ろうじん）を、自分の守護神（まもりがみ）として祭（まつ）りました。

底本：「天狗笑い」晶文社
１９７８（昭和53）年４月15日発行
入力：田中敬三
校正：川山隆
２００６年12月31日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。